

喪失体験に対する意味の付与と自己成長感に関する 研究：体験の領域による生じ方の差異に注目して

大塚, 小百合
九州大学大学院人間環境学府

<https://doi.org/10.15017/15720>

出版情報：九州大学心理学研究. 9, pp.119-131, 2008-03-31. Faculty of Human-Environment Studies,
Kyushu University

バージョン：

権利関係：



喪失体験に対する意味の付与と自己成長感に関する研究

—体験の領域による生じ方の差異に注目して—

大塚小百合 九州大学大学院人間環境学府

The study of giving meaning to loss experience and self-growth feeling
—Attention to the difference of them by the loss experience area—

Sayuri Otsuka (Graduate school of human-environment studies, Kyushu university)

The purpose of this study was assumed to examine how to give meaning to loss experience and to rise self-growth feeling resulting from it. In addition, the difference of them by the loss experience area (①loss of the object of love and dependence—bereavement・separation・pet loss—, ②change of scene, ③loss of boast etc and ④others) was investigated. 390 people from university student to middle and advanced-aged people participated in a questionnaire survey. In the survey, it was requested to answer the most painful loss experience, time of the occurrence, the giving meaning to loss experience and the self-growth feeling resulting from it. The relationships between the giving meaning to loss experience and the self-growth feeling resulting from it were examined using multiple-regression analysis on each loss experience areas. As a result, it was found that how to give meaning to loss experience affected the self-growth feeling differently by the loss experience area.

Keywords: loss, giving meaning, self-growth feeling

1 問題と目的

1. 喪失研究の概観

小此木 (1979) は、喪失とは第一に近親者との死別や失恋をはじめとする愛情・依存対象の死や別離、第二に住みなれた環境や地位・役割・故郷などからの別れ(引越・昇進・転勤・海外移住・帰国・婚約・進学・転校を含む)、第三に自分の誇りや理想・所有物の意味をもつような対象の喪失と定義している。

喪失研究は、対象喪失に伴う悲嘆の研究(白井, 2000)、死別と悲嘆を関連付けた研究(坂口, 1999; 富田ら, 2001; 遠藤, 2002)や、失恋と悲嘆を関連付けた研究(酒井, 2002)など沢山の研究が蓄積され、中でも悲嘆と関連づけた研究が多く行われている。悲嘆の研究の歴史は、「Freudによる「悲哀の仕事(mourning work)」までさかのぼることができる(小此木, 1979)」とされ、そこから様々な研究が行なわれている。それらの中には「悲嘆のプロセス」というものを見出しているものがある。例えば、Lindemann(1944)は、悲嘆を「ショックと不信」「激しい悲嘆」「和解」の3つのステージに細分化し、また、E.Kübler-Ross(1989原版; 2001鈴木晶訳)は、死期の迫った病人の感情の変遷に注目し、「否認と孤立」「怒り」「取り引き」「抑鬱」「受容」という段階を見出した。そして、このような流れから、悲嘆による感情の変遷が、

一連のプロセスの理論に当てはめられるようになった。しかしその一方で、この悲嘆のプロセスについては、科学的検証が難しいことなどから様々な問題点が指摘されている(富田ら, 1997)。加えて、Wortman et al. (1993)は「悲嘆の段階論は、死別によってある人は落ち込み、ある人には何も起きない理由を十分説明できない」とし、個人差への注目を示唆している。この個人差を説明するものとして、Neimeyer(2006)は、「喪失における「意味再構成」の理論」をあげている。この理論とは、これまで自明だと考えていた期待や夢、予想などが、喪失によって崩壊してしまった際、それらに「自分なりの意味づけ」をして新たに再構成していくという理論である。さらに、Neimeyer(2006)は「意味の再構成は、悲嘆行為の中心的なプロセスである」としている。したがって、喪失と切り離せない関係にある悲嘆の背景には、意味の再構成が大きな役割を果たしている可能性が示されているといえよう。つまり、喪失研究において、喪失体験に対する「意味の付与」に焦点を当てる必要性が示唆されていることが伺える。事実、喪失と密接な関係にあるPTSDの研究においても、PTSDを引き起こすような深刻な出来事を克服する過程において、その体験を意味あるものとして位置づけることの重要性が強調されている(Taylor, 1983)。喪失全てがPTSDを引き起こすような深刻な問題であるとは限らないが、事実DSM-IVで死別

がPTSDを引き起こすことが認められたこと (American Psychiatric Association, 1994) や、同じ喪失のケースでも病的なものを発症する人とそうでない人がいることから、少なくとも個人が喪失体験を深刻なものだと捉えている場合には「意味あるものとして位置づけること」が喪失体験を乗り越える際に大きな意味を持つと考えられる。そしてこれらは、Neimeyer (2006) が主張する“喪失における「意味再構成」”の重要性を再認識するものであり、喪失体験に対する「意味の付与」とは体験者にとって重要な役割を果たすといえよう。

また、Deeken, A. (1983) は、“心の傷が癒えるとは、単に健康な状態に復元することではなく、人格的に大きな成長を遂げる事を意味する”とし、辛い体験を乗り越える際の、成長の大切さを指摘している。そして、心に傷を負うようなストレスフルな出来事を契機とし、ポジティブな変容を得ることに関する研究が、死別経験からの人格的発達 (渡邊ら, 2005), 被虐待の経験が有した恩恵 (McMillen et al., 1995) など行なわれている。Park et al. (1996) は、この現象を“ストレスに起因する成長 (stress-related growth)”と捉えた。宅 (2005) は、このParkら (1996) の定義をもとに、“当該ストレス体験の前後で自らがポジティブに変容したと感じる主観的な自己成長感”を定義し、ストレスに対する意味の付与が、自己成長感に影響していることを明らかにしている。したがって、ストレスフルな出来事から成長を得ることの重要性、そしてその成長の背景には、体験に対する意味の付与が重要な役割を果たしている可能性が示唆されている。

2. 本研究の意義・定義

喪失のもたらす影響の大きさについては様々な研究によって明らかとなり、また喪失における意味の付与と成長という側面についても研究が蓄積されつつある。宅 (2005) が行った、体験への意味の付与が自己成長感に影響するというメカニズムの検討は、「体験」を「ストレス体験」と定義しているものの、そこには領域別に特有の「意味の付与」から「自己成長感」を導くメカニズムが存在することを明らかにしている。これらのことから、体験自体がとても大きな影響をもつ喪失という観点においては一概に体験全てが意味の付与や成長を獲得できるとは限らないものの、「ストレス体験」を「喪失体験」と限定した場合にも、体験領域によって特有の「意味の付与」から「自己成長感」を導くメカニズムが見出されるのではないだろうか。林 (2001) が災害による喪失に対し、喪失体験者の喪失に対する意味づけによって体験者に対する心のケアの仕方は変化するということが明らかにしていることから、その可能性には期待がもてると考えられる。そして、この試みは喪失を乗り越え

る過程において「意味の付与」・「自己成長感」がどのように関連しているのかについて示唆を与えることができるのではないだろうか。

よって、本研究では、小此木 (1979) を参考に「領域①：愛情・依存対象の喪失 (重要な人との死別・重要な人との別れ・動物)、領域②：環境の変化 (住みなれた環境・地位)、領域③：自分の誇りや理想、所有物の喪失 (自分の誇り・将来の夢・希望・財産・能力・健康)、領域④：その他」を「喪失」と定義する。なお、領域①については、領域①-1 死別、領域①-2 別離、領域①-3 ペット喪失を操作的に下位領域として設定する。また、Neimeyer (2006) を参考に、「喪失を体験してから今日までの間に、その経験をどんな風に考え、感じてきたか」ということを「意味の付与」として定義する。そして、宅 (2005) の定義をもとに、「喪失を体験することで得るポジティブな主観的感覚」を「自己成長感」として定義する。以上の定義をもとに、研究を進めていくこととする。

本研究では、体験に対する「意味の付与」と体験に起因する「自己成長感」の関連と影響について、喪失体験領域別にメカニズムが異なるかどうかを探索的に検討する。

II 方法

1. 調査対象

調査対象は、喪失に関する体験の可能性、また体験内容の質は、年齢・職業による差が予想されたため、10代の学生から中高年までを設定した。結果、協力者は国立A大学・私立B短期大学の学生298名、中高年92名の合計390名。性別の内訳は男性148名・女性239名・未記入3名で、平均年齢は26.87歳 (18~81歳) であった。各年代の人数と平均年齢の一覧を Table 1 に示す。

2. 調査時期

2006年9月21日~10月21日にかけて実施した。

3. 調査形式

個別記入形式の質問紙調査で実施した。配布と回収は、学生においては、授業後に筆者によって集団配布・集団回収方式で行った。中高年においては、筆者または協力者によって個別配布・個別回収方式で行った。回答はいずれも無記名で行われた。実施時間は約10~15分であった。

4. 質問紙の構成

①フェイスシート

年齢・職業 (学生に関しては、学部・学年)・性別の

Table 1
各年代平均年齢と標準偏差

| 年代 | N | 性別(男・女) | 平均年齢 | SD |
|----|-----|---------|---------------|------|
| 10 | 158 | 67・91 | 18.65 (18~19) | .48 |
| 20 | 139 | 53・86 | 20.75 (20~27) | 1.28 |
| 30 | 20 | 11・9 | 34.25 (30~39) | 2.86 |
| 40 | 23 | 12・10 | 45.39 (40~49) | 2.92 |
| 50 | 30 | 1・29 | 54.67 (50~59) | 3.00 |
| 60 | 12 | 1・11 | 64.08 (60~68) | 2.61 |
| 70 | 5 | 2・3 | 75.00 (71~78) | 3.24 |
| 80 | 1 | 1・0 | | |

記入を求めた。

②喪失体験に関する質問

小此木(1979)を参考に作成した12項目の喪失体験領域から「失ったことが最も辛かったもの」とは何ですか」という教示で単一回答を求めた。項目の一覧を Table 2 に示す。また、その体験の具体的内容、生起時期について自由記述で回答を求めた。なお、具体的内容については「差し支えがなければ、その内容を具体的にお書き下さい」という一文を添えた。

③喪失体験に対する意味の付与に関する質問

②で回答を求めた喪失体験について体験当時から現在までにどのような意味の付与を行ってきたかを測定する

Table 2
喪失体験に関する質問

| | |
|------------|-------|
| ・重要な人との死別 | ・将来の夢 |
| ・重要な人との別れ | ・希望 |
| ・動物(ペット) | ・財産 |
| ・住みなれた環境 | ・能力 |
| ・地位(名誉) | ・健康 |
| ・自分の誇り(自信) | ・その他 |

Table 3
ストレスに対する意味の付与尺度

| |
|---|
| <p>ポジティブな側面への焦点づけ</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. このことは、それもそれでいい機会だったなと考えた 2. このことに、何かいい面もあったかもしれないと思った 3. この経験から、何か得るものがあった 4. これは自分にとって大切な経験になった 5. この経験のおかげと思うようなことがあった |
| <p>出来事を経験した自己に対する評価</p> <ol style="list-style-type: none"> 6. こういう経験をした自分のことを、自分でもすごいと思っている 7. こういう経験をした自分をほめてあげたいと思った 8. このときのことは、自分の中で、よく頑張った方だと思う 9. この経験が、自信になっていると思う |
| <p>出来事のもつメッセージ性のキャッチ</p> <ol style="list-style-type: none"> 10. このことは、人生や生き方について考えてみなさいというメッセージだと思った 11. このことには、何か自分へのメッセージがあった 12. このことは、自分らしさについて考えてみなさいというメッセージだと思った 13. このことには、何か意味するものがあったのではないかと思った |

Table 4
 ストレスに起因する自己成長感尺度

-
1. 心が広がった
 2. 相手の気持ちや立場を考えながら自分の意見を述べるようになった
 3. 人の心の痛みが分かるようになった
 4. 他人が困っていたら、自分から手助けするようになった
-

ため、宅 (2005) のストレスに対する意味の付与に関する13項目を用いた。項目の一覧を Table 3 に示す。教示は「そのことがあってから今日までの間に、その経験をどんな風に考えたり、感じたりしてきましたか」とし、13項目それぞれにあてはまる程度について4件法で回答を求めた。

④喪失体験に起因する自己成長感に関する質問

②で回答を求めた喪失体験について体験前と体験後の変化を測定するため、宅 (2005) のストレスに起因する自己成長感に関する4項目を用いた。項目の一覧を Table 4 に示す。教示は「その経験をする前の自分と今の自分を比べてみて、何か変わったところがあると感じていますか」とし、4項目それぞれにあてはまる程度について4件法で回答を求めた。

5. 分析方法

分析1 回答者が「失ったことが最も辛かった」と回答した項目について、本研究の喪失の定義に基き4つの領域に区分し、度数と割合を算出する。

分析2 意味の付与尺度および自己成長感尺度、それぞれの尺度得点間の相関係数を算出する。

分析3 「意味の付与」・「自己成長感」それぞれの尺度得点と、喪失体験からの経過期間との相関係数を算出する。

分析4 「意味の付与」、および「自己成長感」の各尺度得点について、喪失体験領域別に分散分析と多重比較 (Tukey の HSD 法) を行なう。

分析5 喪失体験領域別に「自己成長感」を従属変数、「意味の付与」を独立変数として重回帰分析を行なう。

III 結果

1. 結果の処理

①年齢・職業・性別に関する質問項目

フェイスシートで回答を求めた年齢・職業をもとに「学生・学生以外」の2つの枠組みに区分した。結果、学生298名、平均年齢は19.63歳 (18~27歳)、学生以外92名、平均年齢は50.48歳 (30~81歳) であった。

本研究では、「10代20代の大学生・短期大学生」を

「学生」群、「30代以上の社会人 (無職を含む)」を「学生以外」群とし、以後分析を進めていくこととする。なお、性別については、男女比に大きな偏りがあるため、本研究では分析に加えないこととした。

②喪失体験に関する質問項目

本研究の喪失の定義に基き、回答者が「失ったことが最も辛かった」と回答した項目について4領域に区分した。

体験からの経過期間については、1ヶ月単位で数値化した。ただし、1ヶ月という単位には、近い過去と遠い過去でその重みが異なり、過去のことになればなるほど1ヶ月の違いが大きな意味をもたなくなるのではないかと考え、対数変換を行った。

③喪失体験に対する意味の付与尺度

全13項目について平均値±SDを算出し、天井・フロア効果を検討した。その結果、項目3・4に天井効果、項目6・7・9・12にフロア効果が見られた。本研究では、喪失体験に対する意味の付与の仕方について、領域による相違を検討することを目的としており、また体験領域ごとの回答者数には偏りがあるため、この効果は相違を反映したものである可能性が否めない。よって、これらの項目は削除せず、分析を進めることとした。

次に、宅 (2005) の方法にならい、全11項目について主因子法およびプロマックス回転による探索的因子分析を行なった (Table 5)。宅 (2005) によって精緻化された構成概念、およびスクリープロットを参考に3因子を抽出した。3因子の累積寄与率は63.9%であった。回転前の固有値は、第1因子6.313、第2因子1.664、第3因子1.372であった。この3因子は因子数・項目共に原論文に等しく、因子名は“出来事を経験した自己に対する評価”“ポジティブな側面への焦点づけ”“出来事のもつメッセージ性のキャッチ”をそのまま採用した。 α 係数は、順に.89、.86、.87であった。本研究では、4件法の回答にそのまま1~4点を割り当て、それぞれの因子毎に合計得点を算出し、更に項目数で除したものを尺度得点とした。得点が高いほど、喪失体験に対する意味の付与の仕方があてはまることを示す。

④喪失体験に起因する自己成長感尺度

全4項目について平均値±SDを算出し、天井・フロ

Table 5
喪失体験に対する意味の付与尺度因子分析：回転後の因子負荷量

| 番号 | 項目内容 | 因子1 | 因子2 | 因子3 | 共通性 |
|-------------|--------------------------------------|-------|-------|-------|------|
| 7. | こういう経験をした自分をほめてあげたいと思った | .939 | -.058 | -.015 | .654 |
| 6. | こういう経験をした自分のことを、自分でもすごいと思っている | .826 | .041 | -.024 | .684 |
| 8. | このときのことは、自分の中で、よく頑張った方だと思う | .767 | .049 | .027 | .504 |
| 9. | この経験が、自信になっていると思う | .675 | .163 | .058 | .518 |
| 2. | このことに、何かいい面もあったかもしれないと思った | .085 | .864 | -.145 | .546 |
| 1. | このことは、それもそれでいい機会だったなと考えた | .100 | .837 | -.193 | .666 |
| 5. | この経験のおかげと思うようなことがあった | .083 | .661 | .085 | .703 |
| 3. | この経験から、何か得るものがあった | -.183 | .650 | .261 | .537 |
| 4. | これは自分にとって大切な経験になった | -.092 | .595 | .257 | .630 |
| 11. | このことには、何か自分へのメッセージがあった | -.005 | -.007 | .879 | .569 |
| 10. | このことは、人生や生き方について考えてみなさいというメッセージだと思った | -.015 | -.099 | .862 | .651 |
| 13. | このことには、何か意味するものがあったのではないかと思った | .028 | .091 | .727 | .542 |
| 12. | このことは、自分らしさについて考えてみなさいというメッセージだと思った | .363 | .029 | .470 | .583 |
| 負荷量の平方和 | | 5.958 | 1.347 | 1.008 | |
| 寄与率 | | 45.8 | 10.4 | 7.8 | |
| 因子間相関 (因子2) | | .612 | | | |
| (因子3) | | .472 | .522 | | |

主因子法・プロマックス回転

Table 6
喪失体験に起因する自己成長感尺度主成分分析

| 番号 | 項目内容 | 負荷量 | 平均値 |
|-----|--------------------------------|-------|------|
| 1. | 心が広がった | .827 | 2.35 |
| 2. | 相手の気持ちや立場を考えながら自分の意見を述べるようになった | .898 | 2.47 |
| 3. | 人の心の痛みが分かるようになった | .851 | 2.70 |
| 4. | 他人が困っていたら、自分から手助けするようになった | .858 | 2.44 |
| 固有値 | | 2.950 | |

ア効果を検討した。その結果、天井・フロア効果はみられなかった。

次に、全4項目について、主成分分析を行ない一次元性の確認を行った。結果をTable 6に示す。分析の結果、第1主成分の負荷量の絶対値は、4項目全て.82以上であり、寄与率は73.8%であった。4項目の α 係数は.88であった。よってTable 6の4項目は一次元構造であることが確認された。本研究では、4件法の回答にそのまま1～4点を割り当て、全4項目の合計得点を算出し、更に項目数で除したものを尺度得点とした。得点が高いほど、喪失体験後の自己成長感が高いことを示す。

2. 結果

結果1 人々が辛いと感じる喪失体験領域の検討

分析1の結果、領域①愛情・依存対象の喪失が最も高く、学生65.10%、学生以外72.83%とどちらも6割以上であった(Table 7)。具体的な内容は、別離では失恋や離婚、環境の変化では一人暮らしや転校・引越、自分の理想や所有物の喪失では目標の不成や怪我のためスポーツの断念・健康の喪失、その他では時間や生きる意味・娘の夢などが挙げられていた。

結果2 意味の付与と自己成長感の関連

分析2の結果(Table 8)、学生以外における、意味の

Table 7
喪失体験領域度数分布

| | 体験領域 | 度数 | % |
|--------|---------------------|-----|-------|
| <学 生> | 領域①：愛情・依存対象の喪失 | 194 | 65.10 |
| | 領域①-1：死別 | 97 | 32.55 |
| | 領域①-2：別離 | 67 | 22.48 |
| | 領域①-3：ペット | 30 | 10.07 |
| | 領域②：環境の変化 | 19 | 6.38 |
| | 領域③：自分の誇りや理想，所有物の喪失 | 74 | 24.83 |
| | 領域④：その他 | 11 | 3.69 |
| <学生以外> | 領域①：愛情・依存対象の喪失 | 67 | 72.83 |
| | 領域①-1：死別 | 46 | 50.00 |
| | 領域①-2：別離 | 19 | 20.65 |
| | 領域①-3：ペット | 2 | 2.17 |
| | 領域②：環境の変化 | 2 | 2.17 |
| | 領域③：自分の誇りや理想，所有物の喪失 | 20 | 21.74 |
| | 領域④：その他 | 3 | 3.26 |

Table 8
各尺度得点の平均 (SD)，尺度得点間相関 (度数)

| | 平均 (SD) | 相関係数 | | | | |
|---------------|-----------------------|------------|---------|---------|---------|-------|
| | | I | II | III | 自己成長感 | |
| 喪失体験に対する意味の付与 | | | | | | |
| <学 生> | I 出来事を経験した自己に対する評価 | 1.68 (.86) | | (298) | (296) | (298) |
| | II ポジティブな側面への焦点づけ | 2.64 (.88) | .579*** | | (296) | (298) |
| | III 出来事のもつメッセージ性のキャッチ | 2.33 (.89) | .462*** | .523*** | | (296) |
| | 喪失体験に起因する自己成長感 | 2.38 (.88) | .469*** | .450*** | .531*** | |
| 喪失体験に対する意味の付与 | | | | | | |
| <学生以外> | I 出来事を経験した自己に対する評価 | 2.25 (.93) | | (83) | (84) | (87) |
| | II ポジティブな側面への焦点づけ | 2.81 (.75) | .568*** | | (81) | (84) |
| | III 出来事のもつメッセージ性のキャッチ | 2.77 (.96) | .518*** | .532*** | | (86) |
| | 喪失体験に起因する自己成長感 | 2.86 (.79) | .417*** | .271* | .483*** | |

注) *** $p < .001$, * $p < .05$

付与のポジティブな側面への焦点づけと自己成長感との相関のみ.270と低い値を示した。しかし，総合的にみると，意味の付与と自己成長感には関連があることが明らかとなった。

結果3 意味の付与・自己成長感と喪失体験からの経過期間との関連

分析3の結果 (Table 9)，「学生」においては，「意味の付与」の3つの下位尺度とはほとんど相関がみられない，または無相関であり，「自己成長感」とも無相関で

あった。一方，「学生以外」においては，「意味の付与」の「ポジティブな側面への焦点づけ」，「自己成長感」と経過期間には相関がみられなかったものの，「意味の付与」の「出来事を経験した自己に対する評価」とは-.37，「出来事のもつメッセージ性のキャッチ」とは-.41と，有意な負の相関がみられた。したがって，学生以外においては，体験からの経過期間が長いほど「出来事を体験した自己に対する評価」「出来事のもつメッセージ性のキャッチ」の意味の付与はしない傾向があることが

Table 9
喪失体験からの経過期間と意味の付与・自己成長感の相関係数 (N)

| 意味の付与 | 学生 | 学生以外 |
|-----------------------|------------|--------------|
| I 出来事を経験した自己に対する評価 | -.05 (276) | -.37 ** (84) |
| II ポジティブな側面への焦点づけ | -.10 (276) | -.17 (81) |
| III 出来事のもつメッセージ性のキャッチ | -.06 (274) | -.41 ** (81) |
| 自己成長感 | .01 (276) | -.07 (86) |

注) ** $p < .01$

Table 10
喪失体験領域による各尺度得点の平均 (SD), および平均値の多重比較の結果

| | 全体 | 1 死別 | 2 別離 | 3 ペット | 4 環境の変化 | 5 理想・所有物 | 6 その他 | F検定 (一元配置) | 多重比較 (TukeyのHSD) |
|--------|-----------|------------|-----------|------------|------------|-------------|------------|----------------------|---------------------|
| <学 生> | (N=298) | (N=97) | (N=67) | (N=30) | (N=19) | (N=74) | (N=11) | | |
| 意味の付与 | | | | | | | | | |
| I | 1.68(.86) | 1.23(.37) | 2.16(.97) | 1.08(.19) | 2.32 (.86) | 1.99(.93) | 1.85(1.00) | $F(5,292)=20.348***$ | 1,3<2,4,5* |
| II | 2.64(.88) | 2.19(.74) | 3.14(.72) | 2.27(.71) | 3.36 (.76) | 2.77(.83) | 2.80(1.01) | $F(5,292)=17.133***$ | 1<2,4,5* 3,5<2,4* |
| III | 2.33(.89) | 2.25(.82) | 2.51(.96) | 2.13(.62) | 2.43(1.12) | 2.39(.96) | 2.52 (.98) | | |
| 自己成長感 | 2.38(.88) | 2.20(.82) | 2.74(.74) | 2.13(.75) | 2.55 (.89) | 2.42(.98) | 2.36(1.07) | $F(5,292)=3.888 **$ | 1,3<2* |
| <学生以外> | (N=89) | (N=44) | (N=19) | (N=2) | (N=2) | (N=20) | (N=3) | | |
| 意味の付与 | | | | | | | | | |
| I | 2.25(.93) | 2.18(1.01) | 2.42(.71) | 1.50 (.71) | 2.32 (.86) | 1.99(.93) | 1.85(1.00) | | |
| II | 2.82(.75) | 2.52 (.69) | 3.36(.60) | 2.40(1.13) | 3.36 (.76) | 2.77(.83) | 2.80(1.01) | $F(5,78)=4.494 **$ | 1<2* |
| III | 2.77(.96) | 2.78 (.95) | 2.96(.90) | 2.13 (.88) | 2.43(1.12) | 2.39(.96) | 2.52 (.98) | | |
| 自己成長感 | 2.86(.79) | 2.98 (.79) | 2.87(.72) | 2.13 (.53) | 2.55 (.89) | 2.42(.98) | 2.36(1.07) | | |

注) I 出来事を経験した自己への評価, II ポジティブな側面への焦点づけ, III 出来事のもつメッセージ性のキャッチとする。

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

示された。

結果4 喪失体験領域による「意味の付与」・「自己成長感」の差の検討

分析4の結果 (Table10), 「学生」において, 「意味の付与」におけるI出来事を経験した自己に対する評価, II ポジティブな側面への焦点づけ, 「自己成長感」において有意な差があることが明らかとなった (I $F(5,292)=20.348$, $p < .001$; II $F(5,292)=17.133$, $p < .001$; 自己成長感 $F(5,292)=3.888$, $p < .01$)。更に多重比較 (TukeyのHSD法) を行った結果, 「意味の付与」のI出来事を経験した自己への評価の平均値は, “領域①-2別離・領域②環境の変化・領域③自己の誇りや理想, 所有物の喪失” が, “領域①-1死別・領域①-3ペット” よりも有意に高い値を示した ($p < .05$)。「意味の付与」のIIポジティブな側面への焦点づけの平均値は, “領域①-2別離・領域②環境の変化・領域③自己の誇

りや理想, 所有物の喪失” が “領域①-1死別” よりも有意に高い値を示し, また “領域①-2別離・領域②環境の変化” が “領域①-3ペット・領域③自分の誇りや理想, 所有物の喪失” よりも有意に高い値を示した ($p < .05$)。「自己成長感」の平均値は, “領域①-2別離” が, “領域①-1死別・領域①-3ペット” よりも有意に高い値を示した ($p < .05$)。一方, 「学生以外」において, 「意味の付与」における, IIポジティブな側面への焦点づけにおいて有意な差があることが明らかとなった ($F(5,78)=4.494$, $p < .01$)。さらに多重比較 (TukeyのHSD法) を行った結果, 「意味の付与」のIIポジティブな側面への焦点づけ平均値は, “領域①-2別離” が “領域①-1死別” よりも有意に高い値を示した ($p < .05$)。

以上より, 「最も辛かった喪失体験」としていかなる領域の体験を想定したかによって, 「意味の付与」の3つの下位尺度得点, および「自己成長感」の得点の大き

さが異なることが示された。

結果5 喪失体験領域による「意味の付与」から「自己成長感」への影響差の検討

分析5において、各領域において「自己成長感」を従属変数、「意味の付与」を独立変数として重回帰分析を行なった。なお、領域によっては回答者の人数が少なく、重回帰分析を行なうには不適切であったため、回答者の人数が30名未満の“ペット喪失（学生以外）”・“環境の変化（学生・学生以外）”・“自分の誇りや理想，所有物の喪失（学生以外）”・“その他（学生・学生以外）”の領域については分析を行っていない。但し別離（学生以外）に関しては、分析4において有意な結果を示しているため、回答者19名と少ないものの、敢えて分析を行うこととする。

①愛情・依存対象の喪失領域

①-1 死別

分析の結果、「学生」における死別体験領域では、回帰式が有意であった ($F(3,93)=13.079$, $p<.001$, $R^2=.30$)。パス係数をみると、「出来事を経験した自己に対する評価」からの.22,「出来事のもつメッセージ性のキャッチ」からの.45が有意であった（順に $p<.05$, $p<.001$ ；

Fig.1)。したがって、学生は、死別体験に対して出来事を経験した自己に対する評価が高く、出来事のもつメッセージ性をキャッチしている人ほど自己成長感が高いことが明らかとなった。一方、「学生以外」における死別体験領域では、回帰式が有意であった ($F(3,36)=8.045$, $p<.001$, $R^2=.40$)。パス係数をみると、「出来事を経験した自己に対する評価」からの.35,「出来事のもつメッセージ性のキャッチ」からの.45が有意であった（順に $p<.05$, $p<.01$ ；Fig.2)。したがって、学生以外は、死別体験に対して出来事を経験した自己に対する評価が高く、出来事のもつメッセージ性のキャッチをしている人ほど、自己成長感が高いことが明らかとなった。

①-2 別離

分析の結果、「学生」における別離領域においても、回帰式が有意であった ($F(3,63)=12.855$, $p<.001$, $R^2=.38$)。パス係数をみると、「出来事を経験した自己に対する評価」からの.29,「出来事のもつメッセージ性のキャッチ」からの.27が有意であった（どちらも $p<.05$ ；Fig.3)。したがって、学生は、別離体験に対して出来事を経験した自己に対する評価が高く、出来事のもつメッセージ性をキャッチしている人ほど自己成長感が高いことが明ら

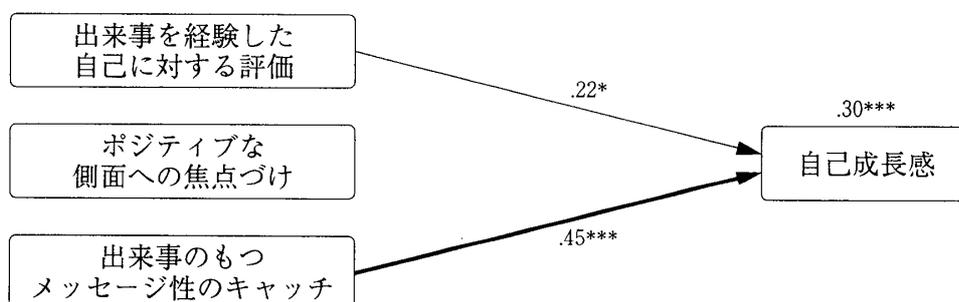


Fig.1 意味の付与から自己成長感への回帰(死別；学生)

注) *** $p<.001$, * $p<.05$, $N=97$

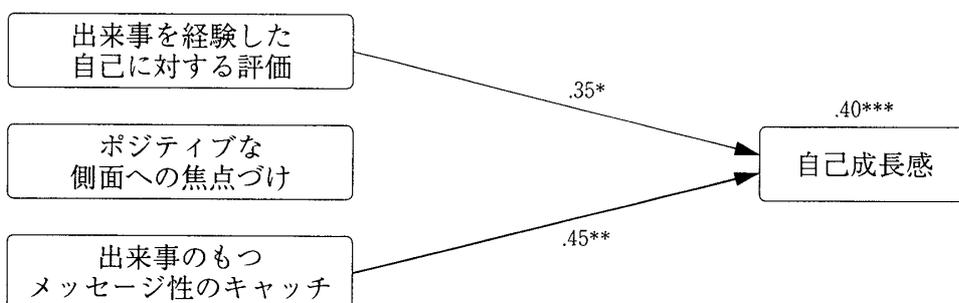


Fig.2 意味の付与から自己成長感への回帰(死別；学生以外)

注) *** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$, $N=40$

かになった。また、「学生以外」における別離体験領域では、有意な回帰式はみられず ($F(3,13) = .293, n.s., R^2 = .40, N=17$), パスも示されなかった。

①-3 ペット喪失

分析の結果、「学生」におけるペット喪失体験領域では、回帰式は有意ではないものの ($F(3,26) = 2.867, p = .06, R^2 = .25$), パス係数が.40 ($p < .05$; Fig.4) で示された。したがって、ペット喪失体験に対してポジティブ

な側面への焦点づけを行っている人ほど、自己成長感が高い可能性が示された。なお、「学生以外」においてはこの領域の回答者数が2名のため、分析を行わなかった。

②自分の誇りや理想, 所有物の喪失領域

分析の結果、「学生」における自分の誇りや理想, 所有物の喪失領域でも回帰式が有意であった ($F(3,68) = 9.909, p < .001, R^2 = .30$)。パス係数をみると、

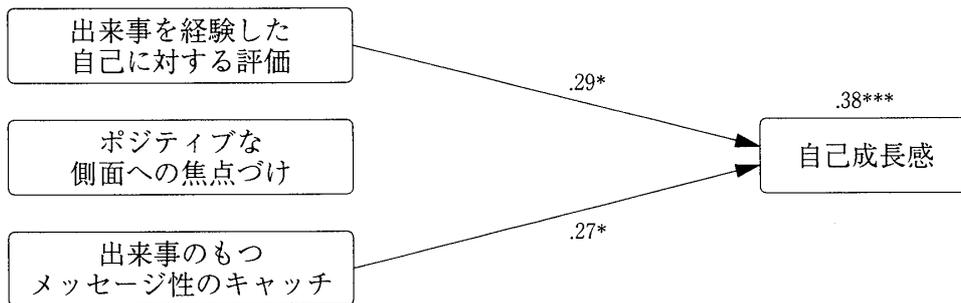


Fig.3 意味の付与から自己成長感への回帰(別離；学生)

注) *** $p < .001$, * $p < .05$, $N=67$

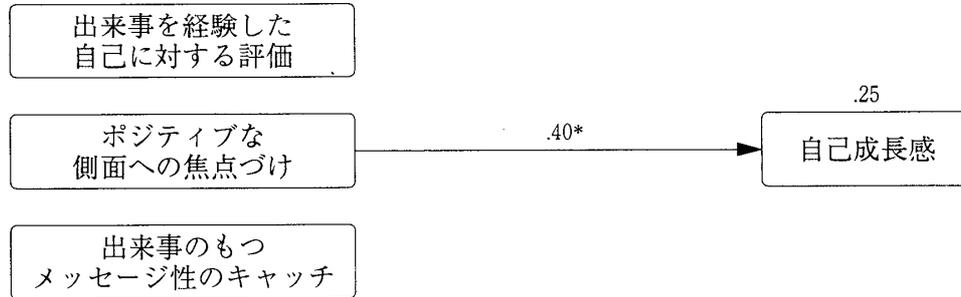


Fig.4 意味の付与から自己成長感への回帰(ペット喪失；学生)

注) * $p < .05$, $N=30$

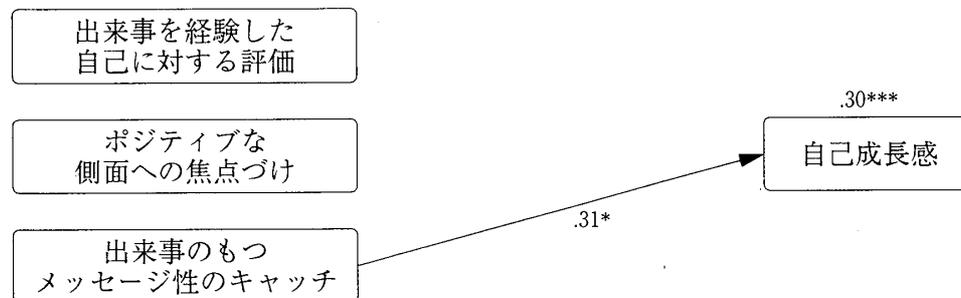


Fig.5 意味の付与から自己成長感への回帰(自分の誇りや理想, 所有物の喪失；学生)

注) *** $p < .001$, * $p < .05$, $N=72$

「出来事のもつメッセージ性のキャッチ」からの.31が有意であった ($p < .05$; Fig.5)。したがって、学生は、自分の誇りや理想、所有物の喪失体験に対して、出来事のもつメッセージ性をキャッチしている人ほど、自己成長感が高いことが明らかとなった。一方「学生以外」は、回答者の人数20名と少なかったため分析を行っていない。

IV 考察

1. 人々が辛いと感じる喪失体験領域の検討

本研究の結果1より、最も辛かったと感じる喪失体験として人々が想起する領域とは、年齢に関係なく「愛情・依存対象の喪失」である傾向が高いことが明らかとなった。回答者の度数 (%) をみると、学生・学生以外どちらにおいても6割以上の人々が「愛情・依存対象の喪失」をあげており、半数以上の人に相当していることからその影響力の大きさが読み取れる。また、その内容を更に下位3領域(死別・別離・ペットの喪失)に分けると、学生において死別と別離の度数にあまり差がない一方で、学生以外において死別は別離の倍以上の度数が示された。白井(2000)が行った研究において、抽出された対象喪失内容が、社会人群では死別、大学生群では別離が多かったという結果が得られており、本研究の結果と一致しているといえよう。そして、このような結果が得られる理由としては、年齢を重ねるにつれて死別を経験する可能性が高くなる状況の現れであること、また死別を経験する可能性が低い学生などにおいては、別離が死別と同じように辛い経験となる可能性があるということが考えられる。

2. 意味の付与と自己成長感の関連、および喪失体験からの経過期間との関連

結果2より、学生・学生以外に区分した場合どちらにおいても、「意味の付与」と「自己成長感」には高い正の相関がみられた。唯一相関が低かったのは、学生以外における意味の付与のポジティブな側面への焦点づけと自己成長感との相関であった。結果3より、「学生以外」において、「意味の付与」の「出来事を経験した自己に対する評価」と「出来事のもつメッセージ性のキャッチ」の2つのみ、体験からの経過期間と有意な負の相関がみられた。

以上のことから、学生に限定した場合には、喪失体験からの経過期間が及ぼす直接的影響を加味することなく、体験に対する意味の付与が体験に起因する自己成長感と影響関連していることが明らかとなった。しかし、学生以外に限定した場合には、喪失体験に対する意味の付与の「ポジティブな側面への焦点づけ」は体験からの経過期間が及ぼす直接的影響を加味することなく自己成長感

と関連していることが明らかになったものの、その相関は低く関連は小さいことが示された。そして更に、意味の付与の「出来事を経験した自己に対する評価」と「出来事のもつメッセージ性のキャッチ」は体験からの経過期間が短い人ほど意味づけを行う傾向にあり、かつ自己成長感との関連も高いことが示された。つまり、学生以外においては、喪失体験からの経過期間が短い人ほど、自己への評価・メッセージ性のキャッチという点での意味の付与が自己成長感と関連する可能性が示唆された。

宅(2005)は、高校生のストレス体験について同様の研究を行ない“経過期間が及ぼす直接的な影響を加味することなく体験への意味の付与が自己成長感に影響する”としている。しかし、本研究の結果から、ストレス体験を喪失体験に限定し、更に回答者を学生以外に限定した場合には、経過期間からの影響も自己成長感に関連している可能性が示唆された。

3. 喪失体験領域別にみた「意味の付与」と「自己成長感」

結果4では、有意な差が見られた項目全てにおいて(学生：出来事を経験した自己に対する評価・ポジティブな側面への焦点づけ・自己成長感、学生以外：ポジティブな側面への焦点づけ)、死別が低い得点を示す傾向、別離が高い得点を示す傾向があることが明らかとなった。これは、今回採用した意味の付与が、死別領域に比べ、別離領域に多く当てはまる傾向にある内容であったと言えるのではないだろうか。学生に限って考えると、本研究では別離内容として失恋を多く含み、酒井(2000)は“失恋を悲しみぬいて乗り越えることで、自分も相手も過度に傷付けないだけの精神的な強さを養い、心理的に成熟していく”としている。得点差がみられた項目内容には、自己への評価、「人の心の痛みが分かるようになった」など相手への理解という酒井(2000)が指摘する人格的成長を導くものに近い内容が含まれていることから、今回採用した意味の付与が、死別領域に比べ、別離領域に多く当てはまる傾向にある内容であったと考える。そして、松井(1993)は“新たに別の人に恋したときにも失恋の悲しみをきちんと受けとめていけば、愛することができる喜びをより強く感じるができる”としている。これが今回、「この経験のおかげと思うようなことがあった」などの内容が含まれていた「ポジティブな側面への焦点づけ」が別離領域で高く得点される傾向にあった背景といえよう。つまり、内省を繰り返して別離と十分向き合うこと、そして新たな恋をする中で失恋のポジティブな側面にも気づくこと、これらは強い関連があると考えられる。これは今回、結果2において、「出来事を経験した自己に対する評価」と「ポジティブな側面への焦

点づけ」が.579と最も高い相関を示していることからいえよう。

また、学生以外に限って考えた場合、学生と異なる部分は別離内容に「離婚」という内容が含まれてくるといふことである。Neimeyer (2006) は、離婚には、相手に対する怒りや失望などの不快感、社会関係や友情・アイデンティティの喪失、離婚後の気持ちの收拾など様々な犠牲を伴うとしている。このようなことから、体験後も離婚を選択した是非に迷う時間が持続してしまう可能性が考えられ、学生では得点の高かった「こういう経験をした自分をほめてあげたいと思った」などの内容を含む「出来事を経験した自己に対する評価」の得点において、異なった結果が得られたのではないだろうか。

4. 喪失体験領域別の「意味の付与」から「自己成長感」への影響差の検討

結果5より、喪失体験領域によって「意味の付与」から「自己成長感」に対する影響には差異があることが明らかとなった。

①愛情・依存対象の喪失領域

①-1 死別

重要な人との死別という喪失体験に対して、体験をした自己への評価と、体験の背景に隠れたメッセージ性のキャッチによって自己成長感が導かれるというメカニズムが明らかとなった。この結果は学生・学生以外それぞれ同様のメカニズムを示し、年齢に関係なく示唆されることが明らかとなった。

渡邊ら (2005) は、死別を体験した人が、体験後「自分で出来る事は全てやったつもりだが、故人にしたらまだまだ足りないと思うから」、「母の死はすばらしいものだったが、私はまだまだすべき点があった」、「自分に出来ることは懸命にしたという点では納得とまではいかにしろ、自分を認めたい気持ちがある反面、やはり告知できなかったうしろめたさがある」など、死別に対して納得できないアンビバレントな気持ちを抱いているにも関わらず、納得している人同様に人格的な発達を遂げていることを明らかにしている。そして、「死別というものが、大変危機的な体験であり、本来容易に納得できるものではないことから、死別に納得できたかどうかという結果が関係するのではなく、自己の中で死別に対してきちんと考えたかどうかという経験が、死別経験による人格的発達につながる」ということを明らかにしている。渡邊ら (2005) の研究における具体的な回答者の言葉をみると、「自分で出来る事は全てやったつもり」「自分に出来ることは懸命にしたという点では納得とまではいかにしろ、自分を認めたい気持ちがある」という自己への評価をしていることも読み取れ、今回自己成長感に影響していた「出来事を経験した自己に対す

る評価」という意味の付与と密接に関係していると思われる。また、坂口ら (2001) は配偶者との死別を体験した人を対象とした研究を行ない、これからの生活や人生に取り組もうとしていない対処パターンの方は、取り組もうとする対処パターンの方に比べて精神健康の状態が悪いことを明らかにしている。今回自己成長感に影響していた「メッセージ性のキャッチ」という意味の付与は「このことは、人生や生き方について考えてみなさいというメッセージだと思った」という内容を含んでおり、坂口ら (2001) の「これからの生活や人生に取り組もうとする」とことと関係していると思われる。つまり、死別体験から自己成長を逃げるためには、死別に対してきちんと考える中で、「自己への評価をすること」そして「死別後の人生に目を向けて考えること」が影響し、今回の結果が得られたのではないかと考える。

①-2 別離

重要な人との別離という喪失体験に対して、回答者を学生・学生以外に区分した場合に差異が示された。まず学生においては、体験に対して、体験をした自己への評価と、体験の背景に隠れたメッセージ性のキャッチによって自己成長感が導かれるというメカニズムが明らかとなった。これは死別の結果と一致している。学生において、最も辛かったとして想起する体験は死別・別離で同程度の割合で検出されたが、学生が死別を経験する可能性が低いことや、宮下ら (1991) は“失恋のダメージは大学生の頃が一番大きい”と指摘していることなどからこの結果は妥当であるといえよう。また、Neimeyer (2006) は“たいていの人は、人生における最初の強烈な喪失体験を、異性と交際し始める思春期に経験している”と述べていることから、学生にとって別離とは死別同様に大きな存在を失う体験であると考えられる。つまり、学生にとって別離とは人生における最初の強烈な喪失体験である可能性が考えられ、今回死別同様の結果が得られたのではないだろうか。松井 (1993) は“失恋の悲しみを十分味わうことによって人の悲しみを理解でき、自分の悲しみに直面できて初めて人の悲しみに対するやさしさを持つことができる”と指摘しており、これは前述した渡邊ら (2005) の“死別に納得できたかどうかという結果が関係するのではなく、自己の中で死別に対してきちんと考えたかどうかという経験が、死別経験による人格的発達につながる”に共通した「体験に向き合う」という背景をもつことから、学生の別離が死別同様の結果を示したと考える。

一方学生以外においては、体験に対しての意味の付与から自己成長感が導かれるメカニズムはみられなかった。Neimeyer (2006) は“愛する人が「身体的には存在するが、心理的には不在である」場合や、家族の誰かが「心理的には存在するが、身体的には不在である」場合など

はグリーフの完結が極めて難しい”とし、死別とは異なった「存在しているものの」そこに問題を抱えている場合の難しさを指摘している。また、学生以外における別離には具体的内容として「離婚」が含まれ、その体験は様々な犠牲を伴うことから葛藤が体験後も持続する可能性を既に述べた。つまり、意味の付与・自己成長感の尺度得点平均値が他の領域と同等または有意に高い数値を示し、また意味の付与と自己成長感とは有意な正の相関があることから影響がないとは言いきれないものの、学生以外における別離は、その体験がもつ特徴故完結が難しく、今回想定したメカニズムだけでは説明できない可能性が考えられる。喪失体験とはやはり大きな出来事であり、体験に意味を付与しそこから自己成長感を導くという流れだけでは説明できない複雑な面への配慮の必要性が改めて明らかとなったとも言えるのではないだろうか。

①-3 ペット喪失

学生におけるペット喪失という体験領域に対して、帰帰式は有意でなかったものの、ポジティブな側面への焦点づけをすることで自己成長感が導かれるというメカニズムの可能性が明らかとなった（学生以外は、回答者が2名しかいなかったため分析を行っていない）。大切な存在を亡くすという面では死別と同様の体験と考えられるものの、異なった結果を示した。死別とペット喪失の質的な違いを考えると、死別体験の場合、その後の現実的な生活において「どうするか」を考えなければならない場面がペット喪失に比べ相対的に多いことが考えられる。どちらも大きな悲嘆を伴う体験であることには変わりないが、ペット喪失では体験から自己を内省し行動することよりも、体験自体に向き合い、意味を付与することで自己成長感が導かれる傾向があるのではないだろうか。

②自分の誇りや理想、所有物の喪失領域

本領域は、「自分の誇り（自信）」「将来の夢」「希望」「財産」「能力」「健康」を下位領域として設定している。結果、学生においては、体験の背景に隠れるメッセージ性をキャッチすることによって自己成長感が導かれるというメカニズムが明らかとなった（学生以外は、回答者が17名しかいなかったため分析を行っていない）。

学生においてこの領域で多く回答された具体的内容は、「誇り」「希望」「健康」であり、「元々医学部志望だったが別の学部に入学したこと」「怪我のためバレーを続けられなくなった」など進路や将来に影響した事実も語られていた。学生が、体験の背景に隠れるメッセージ性をキャッチし自己成長感が導かれる理由としては、学生は将来について考え、行動し、アイデンティティを確立していく途中過程を生きていると考えられ、その過程の中で「自分の誇り」や「健康」を失うことで、また新たに将来や自分について考える岐路となるためではないかと

ということが考えられる。喪失を体験した状況で「人生や生き方について考えてみなさいというメッセージだと思った」という意味の付与を行うことで、新たな視点で将来を見据え、内省し、自己成長感を導く可能性が考えられる。

総合考察

本研究では、喪失体験領域によって「意味の付与」と「自己成長感」の得点には有意な差があることが証明された。しかし、例えば別離領域において、「意味の付与」における「ポジティブな側面への焦点づけ」は、得点で見ると他の領域よりも有意に高い得点を示したものの、その「ポジティブな側面への焦点づけ」から「自己成長感」へのパスは検出されなかった。このような結果が他にもいくつか明らかとなった。つまり、自己成長感を導く意味の付与とは、その得点傾向が高いものがそのまま影響するのではなく、各喪失体験に「自己への評価」をするのか、「ポジティブな側面への焦点づけ」をするのか、「メッセージ性のキャッチ」をするのかという、いわゆる「意味の付与の質」が重要であり、それぞれ領域によって自己成長感を導く意味の付与内容が異なるといえるのではないだろうか。

また、喪失体験とは、その体験自体がとても大きな影響をもつものであり、パスが検出されなかったことなどからも、意味の付与や自己成長感が全ての領域において有効とはいえないことも重要な点であろう。

V 本研究の問題と今後の課題

本研究では、喪失体験領域別における意味の付与と自己成長感の関連を探索的に検討するため、体験内容を限定せずに研究を行なった。しかし、「人々の考える最も辛かった喪失体験」とは愛情・依存対象の喪失に偏り、領域別に分析・比較するには一部の領域において人数が少ないという結果となってしまった。本研究ではそのような状況も踏まえ、分析を進めてきた。結果、領域によるメカニズムの差が多少検出されたが、今後更に各領域の回答者数を増やし、詳細な研究を行なう必要がある。

また、中高年の人数が相対的に少なかったことで、更に詳細な年代ごとの比較ができなかった。学生と学生以外という大きな区分においても、そこには質的な差・量的な差が多々見受けられ、年代による差の検討の必要性が示唆されたと言える。

更に、本研究では男女比の偏りが大きく、性差を分析に加えていない。対象喪失による悲嘆や様々な身体上・行動上の変化を引き起こしやすいのは女性であるという知見（白井, 2000）などからも分かるように、今後性差の検討は不可欠であると考えられる。

以上の反省を踏まえ、今後更なる詳細な研究を行ない、将来的には、各喪失体験領域・年齢・性別等に合わせたサポート内容の具体的な検討を進めていきたい。

謝 辞

本研究は、平成18年度筑波大学卒業論文として提出した論文の一部を抜粋し、修正を加えたものです。貴重なご助言を頂いた、筑波大学の堀越勝先生、九州大学の吉良安之先生、大場信恵先生に深く感謝致します。

引用文献

- American Psychiatric Association (1994). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders (4th ed.)* Washington DC: American Psychiatric Association.
- Deeken, A. (1983). Grief process as a Growth Process. 「悲嘆のプロセスを通じての人格成長」『看護展望』, **8**(10), 17-21.
- E.Kübler-Ross (鈴木晶訳) (2001). 死ぬ瞬間—死とその過程について 中公文庫
- E.Lindemann (1944). Symptomatology and management of acute grief. *American Journal of Psychiatry*, **101**, 141-148.
- 遠藤みち恵 (2002). 中年期健常者の親の死の受容と悲嘆のプロセス 心理臨床学研究, **19**(6), 631-637.
- 林照子 (2001). 喪失経験の心理的プロセスからみる援助に関するアプローチ—中学生・高校生の災害による家屋喪失経験の語りにもみる時間経過のもつ意味より— 日本教育心理学会総会発表論文集, **43**, 208.
- 松井豊 (1993). 恋ごろの科学 サイエンス社
- McMillen C, Zuravin S, Rideout G (1995). Perceived benefit from child sexual abuse. *Journal of consulting and clinical psychology*, **63**, 1037-1043.
- 宮下一博・内藤みゆき・臼井永和 (1991). 失恋体験が青年に及ぼす影響 千葉大学教育学部研究紀要, **39**(1), 117-126.
- 小此木啓吾 (1979). 対象喪失—悲しむということ 中公新書
- Park CL, Cohen LH, Murch RL (1996). Assessment and prediction of stress-related growth. *Journal of Personality*, **64**, 71-105.
- Robert A. Neimeyer (鈴木剛子訳) (2006). <大切なもの>を失ったあなたに—喪失をのりこえるガイド 春秋社
- 酒井美雪 (2002). 青年の失恋体験による対象喪失とモニングワーク—青年の好む歌詞に映し出された心理の変化— 応用社会学研究, **12**, 77-99.
- 坂口幸弘 (1999). 死別後の悲嘆に関する研究(2)—Locus of Controlの緩衝効果— 大阪大学臨床老年行動学年報, **4**, 47-54.
- 坂口幸弘・柏木哲夫・恒藤暁 (2001). 配偶者喪失後の対処パターンと精神健康との関連 心身医学, **41**(6), 439-446.
- 宅香菜子 (2005). ストレスに起因する自己成長感が生じるメカニズムの検討—ストレスに対する意味の付与に着目して— 心理臨床学研究, **23**(2), 161-172.
- Taylor, S.E. (1983). Adjustment to threatening events: A theory of cognitive adaptation. *American Psychologist*, **38**, 1161-1173.
- 富田拓郎・太田ゆず・小川恭子・杉山晴子・鏡直子・上里一郎 (1997). 悲嘆の心理過程と心理学的援助 カウンセリング研究, **30**, 49-67.
- 富田拓郎・伊藤拓・大塚明子・川村有美子・片山弥生・村岡理子・三輪雅子・北村俊則・上里一郎 (2001). 死別体験者の抑圧様式の個人差と死別後の悲嘆反応、対処行動、病的悲嘆、不安障害および気分障害との関係 カウンセリング研究, **34**, 9-20.
- 白井比奈子 (2000). 対象喪失に伴う悲嘆の研究 日本性格心理学会大会発表論文集, **9**, 54-55.
- 渡邊照美・岡本祐子 (2005). 死別経験による人格的発達とケア体験との関連 発達心理学研究, **16**(3), 247-256.
- Wortman, C.B., Silver, R.C.&Kessler, R.C. (1993). The meaning of loss and adjustment to bereavement. In Stroebe, M., Stroebe, W.&Hansson, R. Handbook of bereavement: Theory, research, and intervention. Cambridge: Cambridge University Press. 349-366.